

第10回

第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

旧約聖書の世界観 ～唯一なる神との出会い～

今回学ぶこと

『旧約聖書』に現れている思想は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム（イスラム教）の基礎であり、それぞれの宗教の勢力下にある人々のものごとの見方や考え方に影響を与え続けてきた。まず『旧約聖書』の中の代表的な部分から、その思想の特色を理解し、それが現実の人間生活にどのように働きかけるかを考える。



講師

和田倫明

■ ■ 宗教とは何か ■ ■

キリスト教は古代ユダヤ教を母体として生まれた。ユダヤ教の『聖書』は、キリスト教では『旧約聖書』といわれるが、天地創造や楽園追放、ノアの箱舟など、人類初期のエピソードがおさめられている「創世記」から始まる。

その天地創造の様子は、神が「光あれ」と言った、すると光があった、というように、6日間かけて世界を思い通りにつくっていくというもので、神の絶対性がよくわかる。人間は神がつくり出した世界を治めるといふ、特別な役割を与えられているが、一方で神の指示に従わず楽園を追放されるという罪深い存在でもある。

「出エジプト記」などには、モーセの十戒をはじめとする、多くの掟（律法、トーラー）が示されている。十戒には、唯一神、偶像崇拜の禁止、神の名の神聖、安息日の神聖という、この宗教の特色ある四つの掟と、父母を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、隣人について偽証するな、隣人のものを欲しがらな、という六つの社会道徳の基本が含まれている。

■ 旧約聖書の世界観 ■

ユダヤ民族はヘブライ王国を建国し、ダビデ王・ソロモン王の時代には大いに繁栄したが、やがて衰退し南北に分裂、相次いで他の国によって滅ぼされてしまう。このとき、一部の人々がバビロンに捕らえられる（バビロン捕囚）。ここで、繁栄していた国家が滅びたのは、民族の在り方に問題があったからであると反省し、律法を忠実に守ることを重視する信仰を強めた。

バビロン捕囚はやがて解かれ、ユダヤ民族はかつての王国の地に戻り、いったんは新たに神殿を建て直す。アレクサンドロスの帝国とその後のヘレニズム諸国、そしてやがて台頭してきたローマの支配下に下り、苦難が続くことになる。

そのころから、多くの預言者たちが現れて、救世主（メシア）が訪れて神の国を実現するという預言が希望を与えていた。

■ キリスト教の誕生 ■

イエスは、ローマ帝国の支配下にあったユダヤ民族の中に現れた。彼の言行は、今日『新約聖書』としてまとめられている中の冒頭、四つの「福音書」によって知られている。『新約聖書』には、続いてイエスの弟子たちの言行をまとめた「使徒行伝」、数多くの手紙、そして世界の終わりを物語る「黙示録」がおさめられている。

そして、このイエスこそが、預言者たちが待望した救世主（メシア）であるという信仰がキリスト教である。

◆ コラム ◆

『旧約聖書』の冒頭は「天地創造」の話であり、そのすぐあとに「楽園追放」の話が続く。読み比べてみると、この二つの話の間には、少なくとも表面上はつじつまが合わないところはいくつかある。「天地創造」の話では、男女がつくられるのは最後だが、「楽園追放」の話では、まずアダムがつくられ、その助け手として獣や鳥をつくり、最後にそのあばら骨からエヴァ（イヴ）をつくったことになっている。これを矛盾していないとする解釈もあるが、一方、たとえ矛盾していてもどちらも大切な話として、あえてつじつま合わせをしないで当時伝わっていたまま聖書にまとめたと見ることもできる。